

松井田病院では小児のことばの外来を開設しています。

松井田病院では小児言語聴覚療法にも力を入れております。



○ことばの外来ではどのようなことをしていますか？

主にお子さんの構音障害（発音がはっきりしない）、言語発達遅滞（ことばの遅れ）、吃音（ことばの繰り返し、詰まり）、学習障害（読み書きの苦手さ）について、一人ひとりの状態に合わせ、楽しみながら力を伸ばせるように遊びの要素も取り入れながらリハビリをしています。これら以外のことば・コミュニケーションの問題についても対応しますのでご相談ください。

○どのようなきっかけで来院されることが多いですか？

保護者の方が以前からお子さんのことばについて気になっていて…という以外にも、幼稚園や保育園、小学校に入学してからうまくいかないことが出てきて来院されることもあります。また3歳児健診や就学時健診でことばや発音について指摘されて受診される方も多いと思います。

○どのような流れで指導が受けられますか？

まずは当院の耳鼻咽喉科（小板橋先生）を受診してください。その際、ことばの外来を希望するとお伝えいただければ、言語聴覚士（ST）が次回以降の指導・訓練の予約調整をさせていただきます。STによる指導・訓練はおおよそ1回につき40～60分、

月に1～2回程度になることが多いですが、お子さんの状態によって頻度はさまざまです。

また、耳鼻咽喉科、ことばの外来は月・木・金が終日診療、火・土は午前のみ、水・日はお休みとなっています。

○だいたいどのくらいの期間で指導・訓練は終了しますか？

お子さんの状態は千差万別なため、はっきりとした期間を言うことはできません。逆に、年齢による期間の制限を当院ではしておりませんので、長期間フォローが必要なお子さんでも継続して指導・訓練することが可能です。幼児、小学生だけでなく中学生以降でも対応させていただきますのでお気軽にご相談いただければと思います。

お問合せ先

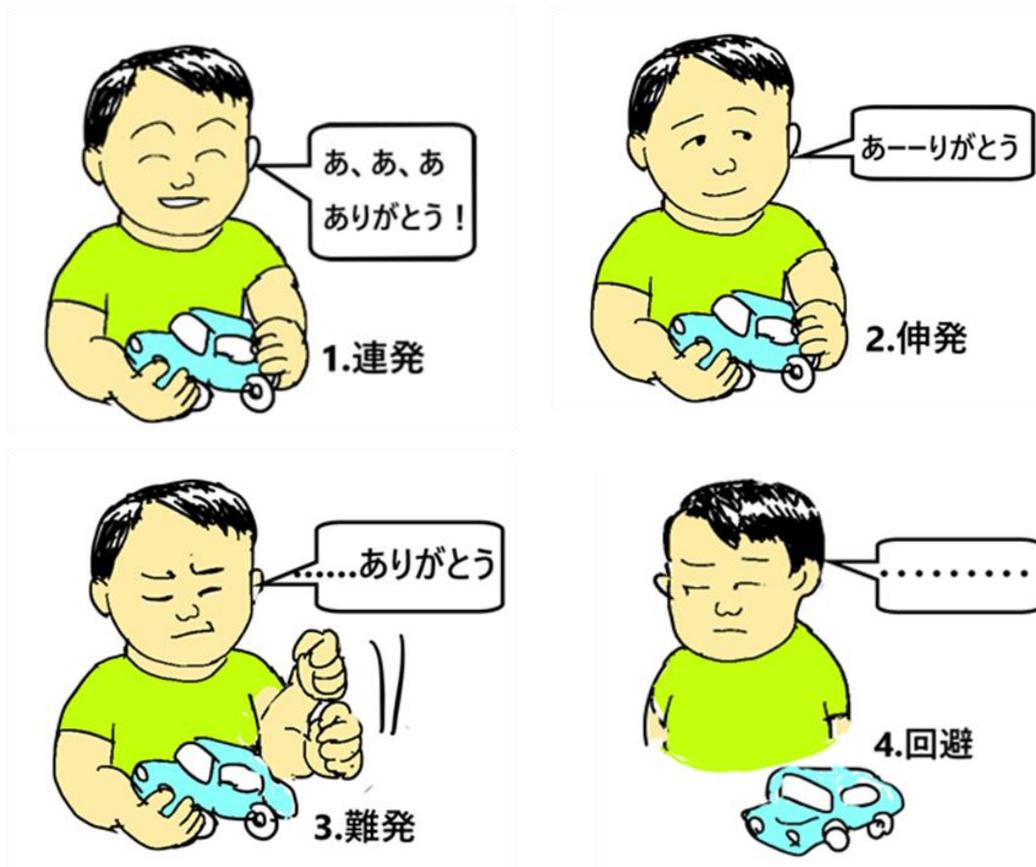
〒379-0221 安中市松井田町新堀 1300-1

公益財団法人群馬慈恵会 松井田病院

リハビリテーション科 言語聴覚士 木村・鬼形

☎ 027-393-1301

吃音



1. 吃音の症状

言いたいことが頭に浮かんでいるのに言葉がスムーズに出ない症状を吃音と言います。言葉のはじめの音の繰り返しが自然におこってしまうことを連発と言います。これを注意されて、連発を出さないようにしゃべろうとすると、最初の音がひきのばされ、伸発という話し方になります。

それでも、「なんでそんな話し方なの」などの指摘をうけると、さらに、連発も伸発もださないと力が入るため、言葉がなかなかでてこない難発という話し方になります。なんとか言葉をだそうと頑張るので、腕をふったり、顔がゆがんだりすることもあります(随伴症状)。

伸発や難発の話し方は本人にとっては、とても心理的負担が大きいものです。そのうちに、しゃべること自体や人との交流をさけてしまうこともあります。

2. 吃音を悪化させないために

当院でも吃音のリハビリを行っています。吃音ゼロが目標ではありません。目標は、その人本来の話し方である自然な連発をいれながら、自分の思う事を楽に話せるように

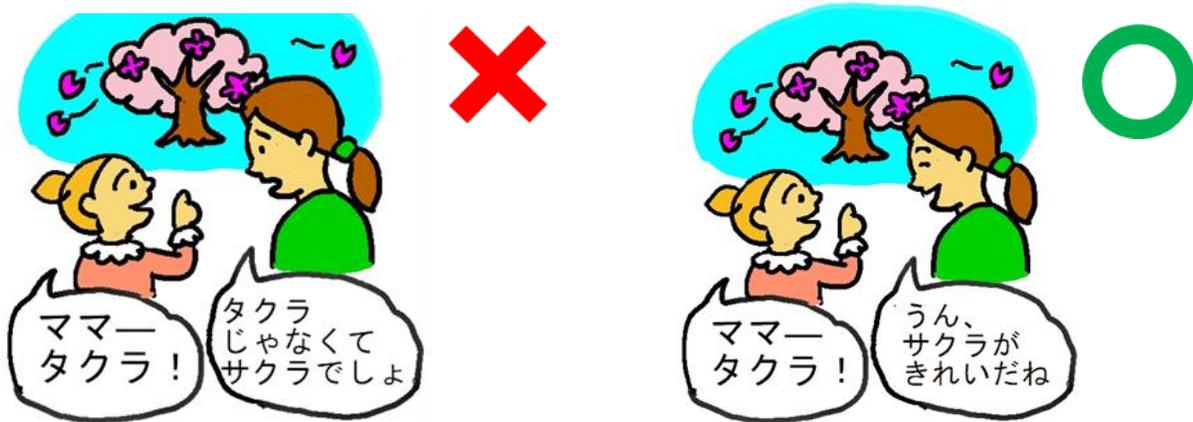
なることです。

吃音は連発→伸発→難発→回避と進んでいきます。進むにつれ、吃音自体はめだたなくなりますが、思う事をしゃべれない不自由さは増していきます。

2. 周囲の理解が必要

吃音の悪化の防止に不可欠なのは、周囲の理解です。とくに進級、進学したときに、担任教師からクラスメートに「吃音はその子の自然な話し方であること、わざとではないこと、絶対にからかったりしてはいけない」としっかり伝えていただくことが子どもの負担を大きく軽減します。

こどもの構音障害



1. 発育途上でだれにでも起こります。

どの子供も言葉を覚え始めの時は、いわゆる「赤ちゃん言葉」です。おさかながオタカナ、つみきがチュミキ、ズボンがジュボン、トラックがトダックなどと発音されるのはよくあることです。

4歳までは、よく発音できない音があっても年齢相応であることが多いです。特に、ザ行やラ行は舌の細かい動きが必要で、6歳くらいでやっと9割くらいの子供が言えるようになります。

こどもが誤った発音をすると、一生懸命に言い直しをさせる親がいますが、これはやめましょうね。話すたびに注意されると、こどもは、話すことがだんだんいやになってしまいます。

大人は正しい発音で返して、そのまま会話を続けましょう。会話をする喜び、人と気持ちを分かち合える楽しみが、言葉を覚えてくためには一番大事なのです。

2. 心配なときはいつでもご相談ください。

こどもが5, 6歳になっても、恒常的に発音誤り(構音障害)が続くときはご相談ください。それ以前でも、少しでもご心配な時は相談ください。当院では言語聴覚士(ST)が構音障害などを対象にリハビリを行っています。

また、構音障害のかけに治療を要する疾患が隠れていることがあります。

難聴があると、正確な聞き取りができず、構音障害がおこることがあります。もともとの聴力が正常でも、中耳炎などの罹患で、聴力が落ちることがあります。また、重度の鼻炎があると、「閉鼻声」となり、「夏の花」が「だつのはだ」のように聞こえます。鼻の詰まった声です。粘膜下口蓋裂があると、「開鼻声」といって、「天狗の子分」が「てんぬのこぬん」のように、鼻にぬけた発音となります。これらの場合、耳鼻科的な治療が必要になってきます。

その他

1. 言語発達遅延(ことばの遅れ)

発語や言葉の意味の理解が同年齢層の子どもと比べ、大幅におくれていることを言語発達遅滞といいます。気になるときはご相談ください。聴力の検査も必要です。当院では言語発達遅延に関してもリハビリを行っています。

2. 読み書き障害

小学校 2, 3 年になっても読み書きができない場合は「発達性読み書き障害」といって学習障害である可能性があります。読み書き障害があると、正しい発音を習得する妨げになることもあります。当院では、必要な子供さんには WISC IV（ウイスクフォー）という知能検査をして、言葉の理解の力を客観的に測っています。